

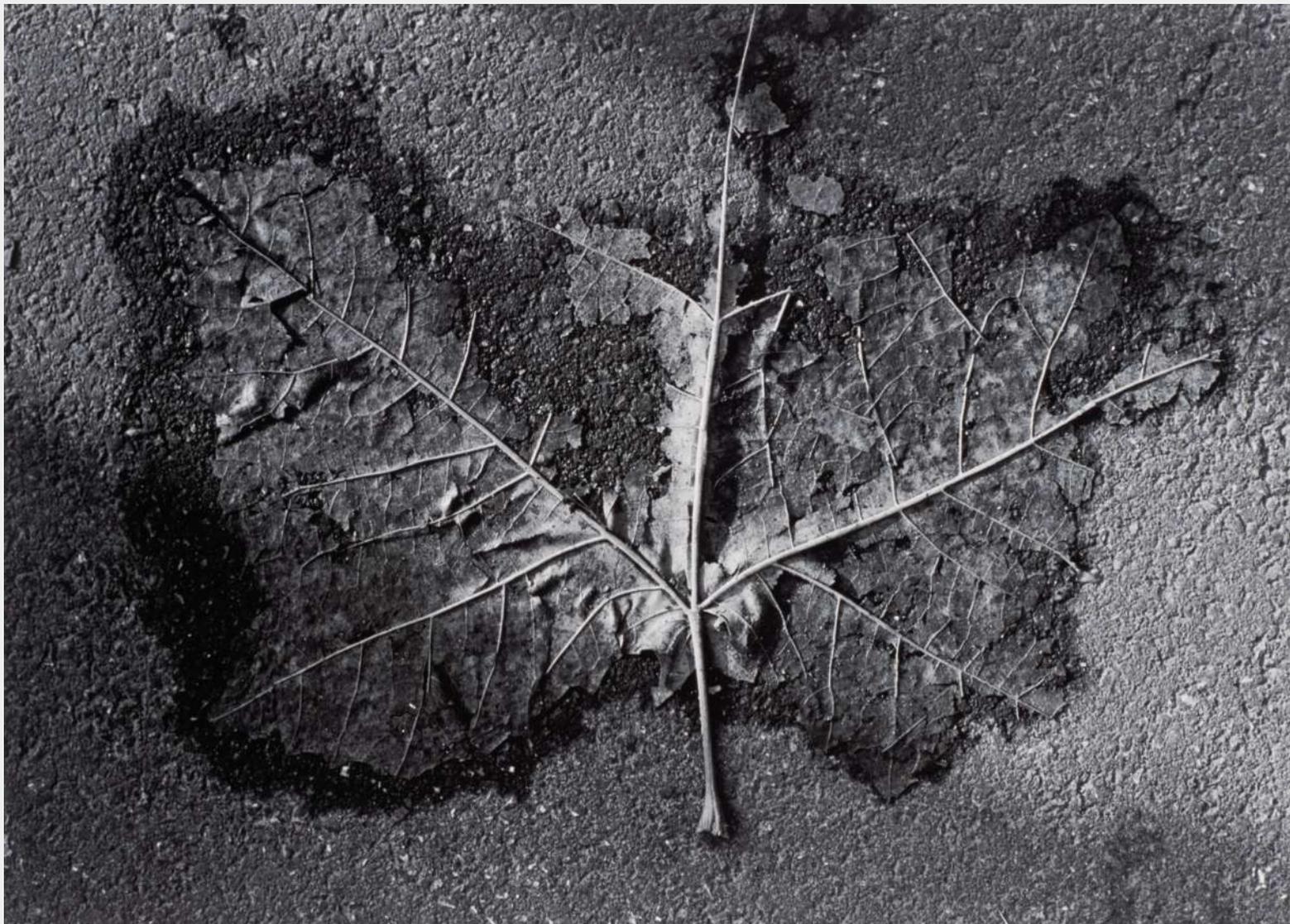
THE MUSEUM OF ART, KOCHI

KENBI LETTER

ケンビレター

no. 108

2021.winter



生誕100年
石元泰博
写真展

2021(令和3)年

1月16日[土]



3月14日[日]

ぬれそぼった葉は踏まれ踏まれてアスファルトに食い込み、やっと葉脈だけがその存在を示していたりするその姿が、不思議にも「命ここにあり」と私に囁いているような気がしたのである。しかもそれは美しい。

石元泰博『刻 moment』あとがきより

Exhibition
Information

高知が生んだ、世界的写真家のすべてがここに

生誕100年 石元泰博写真展

当館にて、高知ゆかりの写真家・石元泰博氏の作品資料を多数収蔵し、2013年には「石元泰博フォトセンター」を開設、専任の学芸員が日々石元作品の保存、調査、普及に関する活動を行っていることは、ケンビレターでも度々ご紹介しているとおります。そんななか、2021年は石元生誕100年となるスペシャルイヤー。この記念すべき年に向け、東京都写真美術館と東京オペラシティアートギャラリー、そして当館の3館合同による展覧会企画が立ち上がりました。昨秋、コロナ禍による会期変更などに見舞われながらも、それぞれ「生命体としての都市」「伝統と近代」をテーマとした東京2館での同時開催が実現。そして、この度当館で開催される「生誕100年 石元泰博写真展」は、両館での展覧会の内容を凝縮して、石元の故郷*、高知のみなさまにお届けしようというものです。石元氏と当館の最初のご縁となったのが、2001年に開催した「石元泰博写真展 1945-2001」。郷土作家とはいえ世界で活躍する巨匠であり、当館にとっては初めての本格的な写真展とあって、当時は戦々恐々、手探りで準備だったそうです。しかし、石元氏や関係者の方々のご協力もあり同展は成功を収め、これをきっかけに、石元氏の作品資料、そして著作権までもを当館へ寄贈いただくことになりました。以降、コレクション展等で継続的に展示紹介してきましたが、企画展の枠組みで回顧展形式の個展を開催するのは、2001年以来実に20年ぶり。当館にとっても大きな節目での開催となります。石元の写真家人生を総覧し、その色褪せない魅力がぎゅっと詰まった本展、是非多くの方々にご覧いただきたいです。 文・朝倉芽生(当館学芸員)

*生まれは米国サンフランシスコですが、幼少から十代までの多感な時期を現在の高知県土佐市で過ごしました。

1《桂離宮 古書院二の間の南面・一の間と囲炉裏の間を望む》1981-82年：写真によって、日本の伝統建築に近代的な抽象性を見出した代表シリーズ。大改修後に撮影された本作は、真新しい畳や襖の白に梁や柱の直線が映え清々しい。/2《色とかたち》1990年代後半-2003年：ドットのパターンはパンチメタルを、色のにじみは自らが描いたドローイングを撮影し表現。1コマに複数回シャッターを切る「多重露光」によって重層的で複雑な色とかたちが生み出されている。/3《シブヤ、シブヤ》2003-06年：渋谷のスクランブル交差点で撮影された最晩年のシリーズ。ファインダーを覗かずに捉えられた若者たちの後ろ姿には言葉とイメージが氾濫している。/4,5《シカゴ 街》1959-61年：写真や造形の基礎を学んだ第二の故郷を写した作品には、高層ビルや車といった商業都市シカゴを象徴するモチーフが度々登場する。

すべて高知県立美術館蔵 ©高知県、石元泰博フォトセンター



2021(令和3)年1月16日(土)~3月14日(日)

9:00-17:00(入場は16:30まで) 会期中無休

観覧料=一般前売720円、一般当日900円(720円)、大学生650円(520円)、高校生以下無料

※()内は20名以上の団体割引料金。*年間観覧券所持者は無料。
*身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷者手帳及び療養者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。
主催=高知県立美術館/読売新聞社/美術館連絡協議会/RKC高知放送 協賛=ライオン/大日本印刷/損保ジャパン 助成=芸術文化振興基金
後援=高知県教育委員会/高知市教育委員会/土佐市/土佐市教育委員会/KCB 高知ケーブルテレビ/エフエム高知/高知シティFM放送
共同企画=東京都写真美術館/東京オペラシティアートギャラリー



1



2



3



4



5

インタビュー動画 公開中!
建築家・内藤廣さんをはじめ、生前交流のあった方々が、石元との思い出や作品の魅力について語っていただきました。



関連書籍やグッズが目白押し。



展覧会図録「石元泰博 生誕100年」

3館合同で制作された図録は、イメージカラーに蛍光パールを採用した挑戦的なデザイン。100周年を記念するにふさわしい、ボリューム満点の一冊です。

定価:3,300円+税
発行:平凡社

ぜひ手に取ってみてください。



TOSAWASHI MEMO PAPER

石元が愛用した写真フィルムとエンボスマークをイメージした、土佐和紙と活版印刷のメモ用紙。一筆箋に便利です。

定価:550円+税(上)、600円+税(下)



石元泰博 生誕100年 特別ラベル Sparkling 純米吟醸 KAMEIZUMI Perle

郷里・土佐市の酒蔵「亀泉」で醸されたスパークリング日本酒で、生誕100年の祝杯をあげませんか。土佐市観光協会オンラインストアで販売中。

定価:5,500円(税込)

他にもポストカードやクリアファイル、ハンカチなども販売予定!

東京での2つの石元展報告

東京オペラシティアートギャラリーで展示された当館所蔵品は、知られざる初期作品やアーカイブ資料を含む350点余。フォトセンターにとって過去に類を見ない大規模貸出で、普段はコレクション専用のフロアまで石元作品が埋め尽くす特別仕様でした。現代アート展で名高い同館の、大規模なインスタレーションが映える広々とした展示室にもまったく負けない、小さなモノクロームに凝縮された作品の強靱な力を改めて思い知らされました。一方、東京都写真美術館は、出品作の多くが同館所蔵。これは石元が重点的な収集対象の作家だったことで、選りすぐりの豊富なコレクションが同館に収蔵されていることによります。それぞれ異なるアプローチによる展示構成で、石元の仕事を多角的に検証できる機会となりました。日頃高知で地道に進めている保存整理や調査の成果を大々的に発信させていただくことができ、感慨深かったです。



東京オペラシティアートギャラリー展示風景:
(伝真言院堂茶室写真/パノール)(国立国際美術館蔵)の一言展示は社観で、来場者の方々の印象にも強く残ったようです。

「綴る画家たち—土佐画人の言葉と絵画」に向けて

会期=2020年12月24日(木)~2021年2月27日(土)

開館時間:9:00~17:00(入場は16:30まで)

※12月27日~1月1日は休館

観覧料:一般370円(290円)/大学生260円(200円)/高校生以下無料

土佐、高知には日記や紀行文、画論など、まとまった文章を綴った画家がたくさんいます。江戸時代中期の土佐の絵師であり「関東南画」の創始者と目される中山高陽の画論『画譚鶴助』、江戸時代後期の土佐文人サークルの中心人物のひとりであった楠瀬小枝の『燧袋』、幕末から近代への変動期を目撃した河田小龍の『小龍日記』、絵入り報道誌『風俗画報』の挿絵画家として名を馳せ明治初期から戦後までの約1世紀を生きた山本昇雲の晩年の日記『米寿』など。彼らは画家であるとともに、漢詩や和歌など、言葉を用いた表現活動も楽しんでくとも共通しています。今回の展示ではこの4人の言葉に基軸を置き、彼らの言葉を取り巻いた絵画作品を展示します。画家の言葉を通して絵を見れば、一見地味に見える絵画作品の中にも奥行きやその時代を生きる人々の体温を感じ取れると同時に、時代の変化とともに形を変えながら連続と繋がっていく画壇の実相も浮かび上がってきます。 文・中谷有里(当館学芸員)



山本昇雲《東京近郊風景画巻》(部分)

「竹崎和征 雨が降って晴れた日」展、ドキュメント・カタログができました!

2020年12月20日、様々なアプローチから絵画表現を追求する須崎市出身の画家・竹崎和征の個展は、大好評のうちに幕を下ろしました。現在竹崎さんが拠点をおく丸亀や、出身地の高知の風景を題材とした作品は、穏やかでありながらも表現上の実験が多数盛り込まれ、絵画の可能性を感じさせるものでした。そう、会場はどこまでも穏やかでした…。その舞台裏では、担当学芸員とデザイナーが寝る間を惜しみ血眼でドキュメント・カタログ作りに励んでいました。時折竹崎さんから送られてくる小鳥の画像(最近飼いはじめたそうです)に癒されつつ、終わりの見えない校正と校正と校正と校正…を経ての校了。怒涛の入稿作業でしたが、竹崎さんの世界観が凝縮された、(その背景にあった汗と涙はまるで感じさせない)素敵なカタログになったと思います。当館ミュージアムショップで販売しておりますので、ぜひ手に取ってみてください。 文・塚本麻莉(当館学芸員)



編集集中の様子



定価:1,200円(税込)

カンヴァス風のカバーが目印

11月3日(火・祝)開館記念日!

11月3日、27回目の開館記念日を迎えました。今年は美術館ホールでは隈研吾展初日の開展式&講演会、駐車場で野外イベント「空を駆けるサーカス」の上演と、大賑わいの一日になりました。



初めてYouTubeで無料配信を実施し、その夜には「News23」でもとりあげられました。



オープニングに引き続き隈さんの講演会「高知とわたし」が行われました。

MUSEUM HALL INFO

美術館ホール 報告

春夏秋映画報告

春の定期上映会

『韓国映画界の怪物
キム・ギヨン監督特集』

◎上映日:2020年7月26日(日)、
8月1日(土)、2日(日)

夏の定期上映会

『真夏に味わうSF&ホラー
～ウルトラQ、ウルトラマン、大林宣彦～』

◎上映日:2020年8月15日(土)、16日(日)

ライブ演奏付き無声映画&秋の定期上映会

『サスペンス映画とコメディ映画 巨匠の饗宴
フリッツ・ラングvsエルンスト・ルビッチ』

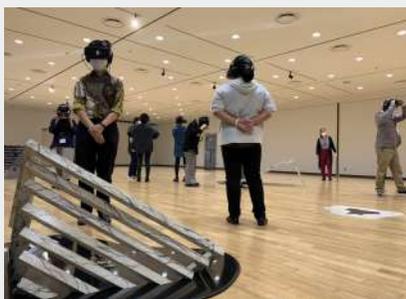
◎上映日:2020年11月18日(水)～22日(日)

新型コロナウイルスの影響による2度の延期を経て、やっと開催となった春の定期上映会(もはや夏でしたが...)。キム・ギヨン監督研究の第一人者・石坂健治氏による講演は残念ながら上映形式となりましたが、石坂氏だからこそ知る貴重なお話の数々に、作品や監督への理解がさらに深められたとの感想を多くいただきました。夏の定期上映会には、高知県立文学館で開催した『ウルトラとくさつワールド 空想特撮大作戦 ～ウルトラマンと夢見る未来～』展とあわせて来て下さった方も多く、今年の高知はウルトラマンが熱い夏となりました。円谷プロとも縁の深い大林宣彦監督の隠れた名作も好評でした。秋の定期上映会では、坂田明、大友良英、勝井祐二、武田理沙という豪華な出演者によるライブ演奏付き無声映画と映画上映を5日間に渡り開催。珠玉のライブ演奏とともにラングとルビッチの傑作を味わう贅沢で濃厚な時間に、駆け付けた沢山のお客様が酔いしていました。文・秦泉寺なほ(当館企画事業課)

AΦE「WHIST」(エーイー「ウイスト」)報告

◎会期=2020年11月7日(土)～15日(日)

イギリスのフィジカルシアターカンパニー、AΦEの初来日公演となった「WHIST」。おかげさまで盛況のなか全会期を終了しました。入国制限の影響で海外招聘公演の多くが中止を余儀なくされるなかでこの公演を開催できたことを、当館としても非常に嬉しく思います。来日にあたって、日本人芸術監督の中村葵さんには14日間の自主隔離をしていただき、私共も徹底した感染対策を講じて上演しました。お客様は、会場に入って不思議な形のオブジェの鑑賞や撮影を楽しんだ後、いよいよVRゴーグルとヘッドフォンを付けて映像の世界に入っていきます。幻想的で時にショッキングな映像を見終わると、オリジナルのカードと心理分析結果へのアクセス方法を提示されます。終演後、お客様が心理分析結果を熱心にお読みになったり、お連れ様とそれぞれがご覧になった映像について話し合ったりしている姿が印象的でした。76通りの映像があり、しかも自分の意思では次の展開を選べないため、「他の映像も見てみたい」というリピーターの方が多く、3回ご覧になったお客様もいらっしゃいました。文・折田彩(当館企画事業課主査)



グラビティ&アザーミス ワークショップ報告

高知ライブエール・プロジェクト

現代サーカス集団Gravity & Other Mythsによるオンラインワークショップを初開催!

去る10月11日(日)美術館ホールにて、インターネットを介して高知とオーストラリアを繋ぎ、Gravity & Other Myths(GOM)のメンバーによる当館としても、またカンパニーとしても初めてとなる「オンラインワークショップ」を親子向け、ダンス経験者向けに、挑戦しました。本来は同週末に公演を予定していましたが、新型コロナウイルスの世界的蔓延により渡航や入国制限のため来日が困難に。公演中止だけが道ではない!と諦めずカンパニーと調整した末、快くりモトでの企画実現に至りました。講師はメンバーより、Lachlan Binns、Maya Tregoning、Dylan Phillipsの3名。高知では香川を拠点に活動するサーカスアーティストの吉田亜希さん、谷口界さんがアシスタントにつくという豪華な設えで、なんと3歳のお子様から大人まで、多様なアクロバットの基礎を体験していききました。何もかも“新様式”の年になりましたが逆境から生まれる可能性にもどんどん挑戦していこうと決心がついた企画でした。GOMが安全に来日できる日が来た暁には皆様に彼らの美しく楽しいサーカスをお届けしたいと願っています。文・松本千鶴(企画事業課主幹)



上:テクニカルチームも真剣そのもの
下:遊び心いっぱいの親子向けWS

想い出の企画

館長寄稿 劇団維新派公演「チャンチャン☆オペラ 少年街」②

維新派一行は、今は無き大阪高知特急フェリーで早朝に高知港に着き美術館に直行、弁当を出した時に「こんな温かい朝ご飯を食べたのは久しぶり」と言ってくれたのも心に残っている。約30人の出演者以外に大工さんなど大勢の設営ボランティアが来高し、楽屋は飯場状態だった。公演をきっかけに初期の維新派メンバーで高知県出身の故・玉水町煙氏(なんと後に南国市長選挙に立候補)とも知り合い、夫婦で営んでいた居酒屋によく出かけたこともなつかしい思い出である。最近井筒和幸監督の1979年制作の維新派公演記録映画「足の裏から冥王まで」を、維新派が天井などの内装を手掛けた大阪のミニシアター、シネ・ヌーヴォーで見ることがあった。舞台上でのセックス行為など、関西の前衛美術集団「具体美術協会」の活動にインスパイアされ、身体表現集団ではなく身体行為集団を目指した松本雄吉氏の伝説は本当だった。同氏は2016年に逝去。同年維新派も解散した。文・藤田直義(当館館長)



舞台設営風景(1994年)